九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「とても」「全然」などにみられる副詞の用法変遷の一類型

播磨, 桂子
九州大学大学院（修士課程）

https://doi.org/10.15017/9442

出版情報：語文研究. 75, pp.11-22, 1993-06-06. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

「とても」「全然」などにみられる副詞の用法変遷の一類型

播磨桂子

一般に必ず否定語を伴うとされる副詞が、肯定表現で程度強調として使われるという現象が見られる。例えば、「全然」という副詞の「全然おもしろい」「全然好きだ」のような使われ方は、しばしば問題とされるようになって久しい。ところが、この「全然」は普通考えられているように「否定を伴うのが本来の用法」というわけではなく、この語が使われ始めた明治時代から昭和二十年頃までは、肯定文に使用されることも珍しくなかったのである。それでは「全然」の用法は今日にいたるまで、どのように用法の変遷をきたしてきたのだろうか。

一

I

「全然」は、明治時代以降に用例が見られるようになる語であるが、当初から肯定表現においても、否定表現においても用いられていることは次のとおりである。

（イ）人智ハ全然経ル所ノ感覚ヨリ生スト主張セリ
（西周「生性発蘊」明治六年）

（ロ）全然疑ヲ容レサル所ニシテ（　　同右　　）

（ハ）一体生徒が全然悪るいです。
（夏目漱石「坊っちゃん」明治三九年）

（ニ）先生は近眼である。のみならず自己の講義の内に全然埋没している。
（「三四郎」明治四一年）

（ホ）全然色気のない平気な顔では人情が写らない。
（「草枕」明治三九年）

（ヘ）下人は始めて明確にこの老婆の生死が全然自分の意志に支配されてゐると云う事を意識した。（芥川龍之介「羅生門」大正四年）

（ト）先生自身の意見と云うものは全然ない。（「手巾」大正五年）

（チ）全然家庭的な、女中仕事にだけ甘んじるような女と結婚したかった。
（網野菊「妻たち」昭和十三年）

（リ）僕はもう全然生まれ変わっていた。
（坂口安吾「青春論」昭和十七年）

又、明治十二年刊行の『英華和譯字典』においては、altogether, totallyの漢訳語の一つとして「全然」があげられており、その和訳

語はそれぞれ、「スベテ、イッショニ、コトゴトク、ジウブン、ミナ、マッタク」「マッタク、スベテ、アハセテ、ノコラズ」が当てられている。

（イ）（ハ）（ニ）（ヘ）（チ）（リ）のような、肯定文における「全然」は、『日本国語大辞典』に、「残るところなく。すべてにわたって。ことごとく。すっかり。全部」の意と記されている用法であるが、これが漢語副詞としての「全然」の本来の意味と言えよう。そして、（ロ）（ホ）（ト）のように否定表現に用いられている場合も、この本来の意味を持って使われていると考えられる。つまり、現在の否定語と呼応する「全然」の用法とは別個に、肯定表現に用いられる用法が存在していたのではなく、「残るところなく。すべてにわたって。」といった具体的な意味をもちながら、係り先が肯定であるか否定であるかを選ばない一つの用法としてあったものではないかと考えられるのである。

そしてさらに、次のように述部に否定語「ない」を持ってはいるが、「全然」の係り先ではない例を見ると、当時と現在の「全然」の用法の違いが明らかになろう。

（ヌ）そこに妙に見透かせない心の存在が仄めくので、彼女は昔から僕を全然知り抜く事の出来ない、従って軽蔑しながらも何処かに恐ろしいところを持った男として、ある意味の尊敬を払っていたのである。

（「彼岸過迄」大正一年）

（ル）この経験は彼にとって全然新しいものではなかった。

（「明暗」大正五年）

（ヲ）私はなんとなく不安を感じた。それは誰しも全然人気以外に立ち得るのでないと思ったからだ。

（小川未明「魯鈍な猫」明治四五年）

（ワ）彼女は、鈴谷が自分の言った事をはぐらかしながら、全然笑ってばかりいるのでないこともわかった。

（伊藤整「典子の生き方」昭和十五年）

以上の用例において、「全然」は、波線を施した部分に係り、部分否定となるのだが、今日では「全然知り抜く」「全然新しい」のような用法がないため、全部否定のように誤解されがちなのではないだろうか。

Ⅱ

いつごろ「全然」が「否定語と呼応する」という規範意識を持たれるようになったか、はっきりした時期はわからないが、昭和二十年代後半には、後に述べるように「全然」が否定を伴うものであることを前提とした、肯定表現での使用に対する批判が見られる。

若田部明氏[1]は一九〇〇年から一九四九年にかけての「全然」の用例を調査し、この語が時間の経過とともに、否定語や否定的内容を含む語との呼応率を高めていることを、数量的に明らかにされている。若田部氏の統計によると、『『全然』の用例数に占める打消の表現や否定的内容を含む語句との呼応率』[2]は一九〇〇年から一九〇九年の間の六十パーセントに対し、一九四〇年から一九四九年の間では八六・五パーセントに増加している。

そして今日では、文献に見られる用例のほとんどが、打消の表現や何らかの否定的内容をふくむ語句と呼応していると思われる。

Ⅲ

ところが口頭語においては、つぎにあげる文章に指摘されているように、昭和二十年代の半ばごろから「全然」を肯定文の程度強調

として使う表現が現われ、批判を受けている。

（カ）近頃気になるのは、よく「全然よくできるの」式の言葉を使うことである。「全然」とは否定の意味であって、「全然出来ない」とか、「全然駄目だ」と云ふのならわかるが、これでは意味をなさない。

（思ひ出『言語生活』昭和二八年三月号）

（ヨ）この頃の若い人達は「あの映画は全然いいんだ」とか「あそこの食事は全然うまいよ」とかいう。この場合の「全然」は「非常に」「たいへん」という意味である。しかし、「全然」は「全然出来ない」「全然感心しない」のように、否定の言い方を伴う副詞で、意味は「まるっきり」である。それを「全然いい」「全然うまい」と肯定表現に使うものだから、年寄りたちからは、とんでもない使い方だと非難されている。ただし、このような使い方は、前例がないわけではない。今、東京では「とてもきれいだ」「とてもうまい」のように、「非常に」「たいへん」の意味で「とても」を使う。しかし本来は「とてもできない」「とても動けない」のように、「とても」は「どうしても」の意味であり、否定表現を伴う言い方なのだ。それが、明治四十年代ごろから、学生たちの間に愛用されて、今では、東京の口頭語としては普通の言い方となってしまっている。

（言葉のしおり　朝日新聞　昭和三九年十月六日）

次の二用例は松井栄一氏[3]が、「全然」の新しい用法として挙げられたものであり、どちらも当時流行の表現として、意図的につかわれているものである。

（タ）アプレゲールは全然エライよ　（「安吾巷談」昭和二五年）

（レ）スゴイじゃないの。全然肉体派ね。（「自由学校」昭和二五年）

これらは、Ⅰであげた、肯定表現に「全然」が用いられている例と、形の上では似ているが、使用者の意識の上で用法が異なるものと思われる。例えば（タ）の例で、「全然」は「エライ」ことの度合いを強調する語であるが、Ⅰの（ハ）の例では、「悪るい」度合いを強調するのではなく、〝何から何まで〟「生徒が悪るい」のだという意味を添えるものであり、「悪るい」事の度合いが強められるのは結果的なことである。

したがって、「全然」は、

Ⅰ　具体的な意味を持って、肯定表現にも否定表現にも使われる。

Ⅱ　もっぱら否定語を伴って用いられる。

Ⅲ　肯定表現で強調語となる用法が出現する。

という、大きく三つの段階に分け得る用法の変遷をたどってきたといえよう。

二―一

そしてこの様な用法の変遷をたどったのは、「全然」ばかりではない。

（ヨ）の後半に述べられているように、「全然」の肯定表現に使う用法が現われたことの前例とされるのが、「とても」の程度強調用法の出現である。[4]

現在「とても」には、

（A）とてもそんなことはできない

のように、否定語と呼応する用法と、

（B）とてもきれいだ

のように、状態性をもつ語の程度を強める用法との二つの用法があ

るが、以前はもっぱら（A）の用法のみであったところに（B）の用法が現われたらしい。

ところが、明治時代以前には、否定語と呼応しない例も普通に見られるのである。そこで、この「とても」に関しても時代をおって用法の変遷を調べ、「全然」の用法変遷に対応させることを試みた。

I

「とても」は平安時代の和文に見られる「とてもかくても」から生じた語と考えられており、「とても」の形は「平家物語」の頃から見られる。

（イ）日本国に平家の荘園ならぬ所やある。とても逃れざらむ物ゆへに年来住み慣れたるところを人に見せむも恥がましかるべし。
（「平家物語」）

（ロ）去来や、とても死なんずる命を、各かの未だ墜ぬ先に打出て
（「太平記」）

（ハ）楯籠る所の兵ども、とても遁れじと思い切りたることなれば、
（　同右　）

（ニ）とても人間に生まれなば、かやうの人とこそ一夜なりとも契り、思出にせんと人々うらやみ給ひけり　（鉢かつぎ「御伽草子」）

（ホ）とても罪つくるならば、少しも徳のあるやうにはさせたまはで
（人法師「御伽草子」）

（ヘ）本朝ハトテモ乱ルベシ
（「蒙求抄」）

（ト）とても奉公する身もこんな内かたにいますが仕合
（「好色一代女」）

（チ）とても淋しきくれはどり、綾の衣を砧に打ち、少しの思ひを晴らさんと、
（謡曲　よし原小歌鹿の子）

（リ）とても縁なき仲ならば、などや始のつらからん
（謡曲「松の葉」）

以上の例のように、条件句に用いられることが多いが、「どうしてもこうしても、どうせ、結局」といった意味をもち、否定表現か肯定表現については限定されない。又、中世には、（イ）や（ハ）のような否定表現の場合でも、現代語の「とても」のように打消語に直接かかってそれを強めるものではなく、どうしてもこうしても、どうせこうなるのだ、という諦念のような気持ちの表現性をもつものである。はっきりと現代語と同じ用法と思われるものは江戸時代以降になって現われるようである。

（ヌ）あの御きしょくでは、とてもからいではおかせられまひ
（「虎明本狂言集」うつぼざる）

（ル）町人は算用おろかに秤め覚えず日記付さへならざるを、迚も商人は思ひもよらず
（「本朝二十不孝」）

（ヲ）まことに君の宣旨には、靡かぬ草木はなけれども、この道一つは稲舟の、とても靡かぬわが心
（『松の落葉』十九）

以上の三例は、（イ）や（ハ）のように諦念の表現とはとり得ないものであり、「どうしても、到底」の意で、否定を強めていると考えるべきであろう。

II

江戸時代末期の「いろは文庫」では、否定表現を伴うものは十五例、伴わないものは、

（ワ）とても別れるお気ならば、私も小児もおまへの手で殺して置いてお出なさいヨ
（「いろは文庫」巻二八）

の一例となっている。

そして明治時代に入ると、ほとんど否定表現を伴った例しかみられなくなり、しかも現代の否定語と呼応する用法と同じものになっている。

（カ）弥次郎、とてもかなわぬと見て、たゞ口の中にぶつくさぶつくさ　（「東海道中膝栗毛」）

（ヨ）迚も黄鳥のやうにハ喉の加減あしければ、声も曲もまはるまじけれども真似ぐらゐハ致すべしとて　（「寄笑新聞」）

（タ）薄い氷を踏むやうな一日〻〻の憂き世渡り、今の世間の模様では迚も無事にはしのがれまい　（「春雨文庫」）

（レ）とうとう下読の間暇がなくなっちまって、兎ても自分じゃアやらりゃアしないワ　（「当世書世気質」）

以降、大正時代まで「とても」は否定語と呼応するものであったらしく、調査した小説（「浮雲」「坊ちゃん」「草枕」「三四郎」「門」「彼岸過迄」「こころ」「我が輩は猫である」「それから」「虞美人草」「地獄変」「戯作三昧」「杜子春」「藪の中」「出家とその弟子」「生きとし生けるもの」）において、すべて否定表現を伴っている。

Ⅲ

「とても」の程度強調用法が普及しはじめたのは、次に挙げる芥川龍之介の記述などから大正十年頃と推定されている。

（ソ）「とても安い」とか「とても寒い」とか云ふ「とても」の東京の言葉になり出したのは数年以前の事である。勿論「とても」と云ふ事は東京にも全然なかった訳ではない。が従来の用法は「とてもかなわない」とか「とても纏まらない」とか云ふやうに必ず否定を伴ってゐる。　（芥川龍之介「澄江堂雑記」二十三　大正十三年）

当時は、今の「全然おもしろい」に相当するような、はやり言葉的な用法であったらしく、小説の若い女性の言葉や、童謡、童話に比較的早くから例が見える。

（ツ）ほんとにとても暑いわ。どうしたんでせう。　（「二人妻」大正十一年）

（ネ）とても大きなお風呂です（童謡「大きなお風呂」大正十四年）

（ナ）ぼく、とてもいいことを考えた。（「海からきた卵」昭和三年）

以降「とても」の程度強調用法の普及はかなりめざましく、正用として認められ、否定語と呼応する用法とは別の用法として共存し、現在に至っている。

（ラ）生きている限りはとても逃れられないことなのだろうか。　（「女生徒」昭和十五年）

（ム）おかあさん、とても交際が多いのだから　（　同右　）

（ウ）とても一緒にはいられなくなったから逃げてきた　（「来訪者」昭和十九年）

（キ）それがとても凄いんださうです　（　同右　）

以上述べてきた「とても」の用法変遷をまとめると、Ⅰの「どうしてもこうしても、どうせ、結局」の意味で肯定表現にも否定表現にも用いられる用法から、Ⅱに述べたようにもっぱら否定語と呼応するようになり、そこにⅢの肯定表現での程度強調用法が出現したということになる。これは「全然」の三段階の用法変遷に対応させることができるものであると言えよう。

二―二

漢語「全然」に対応する和語として「まったく」があり、意味や用法の上でも重なりをもつが、「全然」と異なり、肯定表現にも否定表現にも用いられている。柄沢衛氏[6]は、「全然」と「全く」の用法を対比させ、『『全然』のくずれた、俗語的な用法は、漢語『全然』が和語『全く』の用法を埋めるようにして生まれたものであり、本来『全然』の持つべき用法として、内在していたものである。』と述べておられるが、「まったく」に関しても「全然」の用法変遷と対応するような用法変遷が見受けられるのである。

I

「まったく」は形容詞「またし」の連用形から生じた副詞である。源氏物語や宇津保物語に見られる例は、まだ副詞ではなく形容詞連用形の段階と考えられる。

（イ）大きなる倉は、一国をヲさむるに、公事、全くなして、私の財、数多く貯ふ。（「宇津保物語」藤原の君）

（ロ）俊蔭の朝臣のせち書き読みて侍ける。またく細かにして侍ルめり。（同右　蔵開　上）

（ハ）この家の辺の柴刈り、その垣いと全く新しく造りて檜皮の御殿いとをかしげに造りて（同右　蔵開　下）

（ニ）すへていとまたくすきまなき心もあり（「源氏物語」東屋）

（ホ）いとまたく賢き君にて、思ひ取りてければ（同右）

（ロ）（ハ）（ニ）（ホ）の例で、「またく」が下接する、「細かに」「新しく」「すきまなき」「賢き」に対して、並列の関係にあるか、連用修飾の関係にあるかは意見の別れるところであろう。筆者は並列の関係にあると考えるが、いずれにしても「またく」は「欠けるところなく、完全に」といった意味を持つものである。

今昔物語集では、原栄一氏[7]が指摘されているとおり、「全ク」十七例のうち十四例が否定語と呼応しており、肯定文での三例のうち、

（ヘ）此ノ一ノ猿ハ前生ノ功徳ニ依テ六根ヲ全ク具セリ（「今昔物語集」巻五）

（ト）今生ニ全ク定恵ノ行業闕ヌ（同右　巻十三）

は、副詞として認められよう。

下って徒然草にも肯定表現での使用が一例見られる。

（チ）銭あれどもゝちゐざらんは全く貧者とおなじ（「徒然草」二一七）

II

「今昔物語集」においても否定語と呼応する用法がほぼ固まっているが、中世の文献を調査すると、「平家物語」の二十三例、「保元物語」の三例、「宇治拾遺物語」の一例、「十訓抄」の四例、「風姿花伝」の三例、「義経記」の四例、「天草版平家物語」の十一例、それぞれ「全く」の全例が否定語を伴っている。調査した資料が少ないため確言することはできないが、現在の「全然」と同様否定語と呼応する副詞であると意識されていたと見てよいのではないだろうか。

III

近世に入る頃から、肯定文で、以下に述べる判断やことがらを強調する用法が見られるようになる。

（リ）全く馬が驚きました故、箇様なそそうもいたしましたのでございますれば、（「いろは文庫」）

（ヌ）叔母の言艸を愛想尽かしと聞取ッたのは全く此方の僻耳で、（「浮雲」）

「まったく」には、「まったく美しい」「まったくすばらしい」のような状態性の語の程度強調ばかりでなく、(リ)や(ヌ)のような用法もある点で、「全然」のⅢとは異なる。なお、現在では「本当に、実に」と同じ用法が多いようである。

二―三

「断然」という語も「全然」と同じく明治時代から用例が見られる語であり、「きっぱりしたさま」を表すものである。

(イ) 断然架空の業を廃し　(「高橋阿傳夜叉譚」)

(ロ) だれが何と言はうト闕はない、断然辞して仕舞ふ　(「浮雲」)

(ハ) 彼は断然信じていた　(「それから」)

ところが、この語もまた、いつのまにか否定語と呼応するものという規範意識を持たれるようになったらしく、次の様な記述が見られる。

(ニ) 浅沼:「断然」なんて言葉は、その次に否定の言葉が来るのが普通でしょう

丸野:普通はそうでしょう

浅沼:ところが「断然やる」とか・・・

(『言語生活』昭和二八年六月号　座談会「マスコミュニケーションと日本語」)

(ホ)「とても」と似た「断然」も言語規範が緩んで新しい用法が生まれたと言ってよい。もともと「断然たる処置」とか「断然手を切る」とかのように、きっぱりとするさまをいうが、昭和初期のモダン語では、「断然おもしろい」のように強調語として使われた。(米川明彦『新語と流行語』)

このように、この語にも「きっぱりしたさま」を表現し、かかり先に否定表現か肯定表現かの制限を行なわない用法から始まって、否定表現を必ずともなうという規範意識を持たれるようになり、そこに肯定表現の程度強調用法が出現するという「全然」の場合とよく似た用法変遷があったと考えられるのである。

また「断然」の同義語「断じて」にも同様の事情があったと思われる。[8]

二―四

「なかなか」という副詞は、「とても」と同様に現代語において否定を伴う用法と、程度を強調する用法をあわせ持っている。この副詞については、井手至氏、塚原鉄雄氏、濱田敦氏の共同研究による『国語副詞の史的研究』[9]にくわしい史的考察がなされている。以下、そこに述べられた「なかなか」の用法変遷をまとめてみた。

Ⅰ

古代[10]では、「なまじっか」あるいは「かえって」などのように現代語訳される「なかなかに」「なかなか」がみられる。

(イ) なかなかに人とあらずは酒壺になりにてしがも酒に染みなむ　(「万葉集」巻三)

(ロ) うしとても厭ひもはてぬ世の中をなかなか何に思ひしりけむ　(「千載集」巻十一)

(ハ) 高杯にまゐりたる大殿油なれば、髪筋なども、中々昼よりは顕証にみえて眩ゆけれど念じて見などす　(「枕草子」一六五)

井手氏らは、「なかなかに」を「なか（中）」の畳語に助詞「に」の接したものと分析し、語構成の上からは「甚だ中途半端な状態で」といった意味になるだろうとされている。ただし「なかなかに」が「中途半端に」といった限定であるのに対し、平安時代の「なかなかに」になると、「限定ではなくて、同一素材に対する他の次元からの把握ということになり、もはや『中』の意義は、殆ど喪失しているのである。」と述べられている。

Ⅲ

中世前期から中期にかけて、「なかなか」はその意味機能を情態から程度へと変え、中世中期にははっきり打消に呼応するものが出現する、として次のような例があげてある。

（ホ）いつもより一きは手ぎはにはくべしと種々思案をするに、中々はかれそうにもなし　（「一休咄」）

（ヘ）俺がひっかついだ鉄砲は、腰には中々はさまれない。（「雑兵物語」）

（ト）落城の日ながつぼねに居候。なかなかいまだ落城などとは思ひもよらず。　（「おきく物語」）

さらに、「この期の資料に、単に程度を表す副詞として用いられる例は極めて少ないので、応答のそれでなければ、否定と呼応するものが、その大部分を占める。就中、後者は時代とともに益々圧倒的な地位を獲得していき、雑兵物語やおきく物語ではすべての用例が、否定と呼応するものとなっている。」という。

Ⅲ

中世後期には、現代語とほぼ一致した意味用法を成立させている、とされる。

（チ）野呂公はなかゝゝ出来るぜ　（「花暦八笑人」）

（リ）ハゝアうしろすがたはなかなかいきなふうぞくだ。コリヤこのまゝではおかれぬはへ　（「東海道中膝栗毛」）

（ヌ）そふさへかくごきはまればうれしいうれしいさりながらここでなかなかおもふやうにもなるまい。　（「重井筒」）

此で（チ）（リ）は「とても」の程度強調用法に、（ヌ）は否定語と呼応する用法に類似するが、それぞれ「とても」よりも強調の度合いは弱い。

「とても」の程度強調用法が、極度の程度を表現しようとするのに対し、「なかなか」は話し手の期待や観念などをもとにした相対的な程度の強調となっているようである。

否定と呼応する用法では、「とても」がより強く不可能を表現するのに対し、「なかなか」はどちらかというと困難の表現であると思われる。

「なかなか」の歴史については、用例や考察など、そのほとんどを『国語副詞の史的研究』によったので、それだけではっきりしたことを述べるべきではないが、この副詞も先にあげた一連の副詞の三段階の用法変遷に類する過程をたどったように思われるので、ここにあげた。いずれ自分自身で調査しもう一度考察を行いたいと思っている。

三

これまで、三段階に分けることができるような、類似した用法変遷をたどった副詞を挙げてきたが、その用法変遷の過程をまとめる

と次のようになる。

Ⅰ．副詞がその語自体に具体的な意味を持ち修飾語となっている段階である。この段階では、係り先が肯定であるか否定であるかを限定されない。

Ⅱ．必ず否定語、あるいは意味の上で否定的である語を伴って用いられる段階である。Ⅰ段階で持っていた具体的な意味は表だったものとしてはほとんどなくなり、否定の強調の仕方として残っていると考えられる。

Ⅲ．肯定表現においての程度強調用法が加わる段階である。Ⅱ段階の用法と共存し、異なる二つの用法として意識される。

それではどのような事情によって、このような用法変遷がおこったのだろうか。勿論、それぞれの副詞に個々の事情があることだろうが、この三段階の変遷は、偶然の一致ではなく何か共通する事情によるものではないだろうか。

先行の論文ではⅠ段階からⅡ段階への変遷、Ⅱ段階からⅢ段階への変遷のそれぞれについて、原因を説明されたものはあるが、[11] いずれもそのどちらかの変遷のみに重点を置いて言及されたものであり、何故もともと肯定表現にも使われていたものが一旦は否定表現に傾き、ふたたび肯定表現に用いられるようになったのかという点で疑問が残る。ここではその点に重点をおき、この三段階の用法変遷を、一つの流れとして考えたい。

次に、Ⅰ段階から順を追って用法変遷の事情を述べる。

〈Ⅰ段階からⅡ段階へ〉

Ⅰ段階では、それぞれの副詞はその語自体に具体的な意味を持っており、肯定表現の場合も否定表現の場合も、その係り方は同じである。ところが、この段階で肯定表現に使われた場合と否定表現に使われた場合とを比較すると、否定表現の方が程度を強調することになりやすいようである。例えばⅠ段階「完全に」の意味の「全然」の場合次のように、

A．全然新しい／全然愛している

B．全然新しくない／全然愛していない

肯定文であるAでは、「完全に」の意味は、ある範囲を感じさせるので、程度強調としては弱く、「完全に」の意味を離れない。Bのように否定表現になると、「完全に―ない」ことは、それが少しも存在、成立をしないゼロの状態を表し、否定としては最も強い表現となる。

「とても」や「断然」のような、話し手のものごとの認め方、判断の態度の表現となるものについても同様に、否定表現の場合、そのものごとの存在・成立がいささかも認められない、という否定として最大の強さを持つ。

そこで、否定表現に使用されるとき、これらの副詞は直接否定そのものにかかってそれを強調するように受け取られるようになり、ついにはその副詞自体に否定を予測させるような意味が加わって、否定表現と呼応するⅡ段階に移行したのではないだろうか。

〈Ⅱ段階からⅢ段階へ〉

Ⅱ段階では、Ⅰ段階で持っていたそれぞれの語自体の具体的な意味は、表面的にはあまり意識されないものとなり、否定の強調の仕方となって存在しているようである。ここでは、副詞の持つ働きは、否定語の誘導と、その否定に直接かかっての強調である。そこから程度を強調する働きだけを取り出して肯定表現に用いるようになっ

たのがⅢ段階であろうと考えられる。これはⅢ段階の否定表現における極度の表現を介して程度強調になったのではないか。否定の極を表現する副詞を肯定表現に用いることは、斬新で効果的な程度強調語を要求する作用に応じることであり、俗語としての流行が起こる理由に成り得ると思う。

また、「とても」の項で述べたように、Ⅲ段階の用法とⅡ段階の用法は共存しているのが見られるが、Ⅰ段階では肯定表現の場合も否定表現の場合も一つの同じ用法であったのに対し、これらは異なる二つの用法として意識されるようである。一方は否定語を誘導し否定の程度を強める用法であり、一方は肯定表現で状態性を持つ語に係り、その状態の程度が非常に高いことを表す用法である。「全然」の場合、Ⅰ段階と形の上では差がないが、「完全に」という意味はほとんど意識されなくなり、否定表現にかかるときの極めて強い強調の働きが残ることで「全然いい」「全然うまい」のように肯定表現に使われる場合にも、効果的に程度を表現できるようになっていると思われる。

ここに述べた、副詞の持つ働きの変遷を示すと次のとおりである。

Ⅰ具体的な意味→Ⅱ否定の強調（否定の誘導→Ⅲ否定の強調（否定の誘導→極度の程度強調）強調）強調

これはその具体的な意味に程度性を持つ副詞が、形容詞や形容動詞の連用修飾に近い性質から、一旦否定語との結びつきを強めることによってより純粋に程度強調という機能を持つに至る過程といえよう。

四

本稿では、三段階の用法変遷が見られる副詞をあげたが、Ⅰ段階からⅡ段階への、またⅡ段階からⅢ段階への変遷のみが見られる副詞もある。[12] これらに関しても、前章に述べた用法変遷の事情をあてはめることが出来よう。

前者の例としては、「到底」「決して」があげられる。どちらも現在は、もっぱら否定語と呼応する副詞だが、かつて「到底」は、

「到底書生をしているうちは、親の脚をかじってをるのだから。」
（坪内逍遙「当世書生気質」第六回）

「『ええ、到底辞職もんでしょう。』と嬉しがっている。」
（夏目漱石「それから」）

のように、「結局、つまるところ」の意をもち、Ⅰ段階の「とても」に類する用法で、「決して」は、

「決して弟子の中に此曲者有るには極れり」
（江島其磧「鬼一法眼虎の巻」）

「歌でみりゃ決してあなはあるとみへ」
（雑俳　末摘花　二）

のように「必ず、きっと」の意味で、肯定文にも用いられている。[13]

後者に関しては、「全然うまい」と同様に通常呼応の乱れとされるが、「とても」の程度強調用法が定着したように、これらが定着することもありえないことではない。また、「決して」のようなⅡ段階にある副詞がⅢ段階に将来移行するようなことも、考え得ることであろう。

(1) 若田部明「『全然』の語史的研究—明治から現代まで—」(『解釈』平成三年十一月号)

(2) 打消の表現とは「全然ない」の型になるものであり、否定的内容を含む語句とは、「①『反対』『別』『違う、異なる』などの否定的内容を含む語②『不必要』『無意味』など、「不」や「無」という打消を含む語句」とされている。なお、本稿では、これらも否定表現と意識されているものと考え、否定表現として扱った。

(3) 注(4)参照

(4) 「とても」の程度強調用法の出現に関して論じられたものを次に挙げる。

新村出「山言葉」(『京都帝大新聞』昭和二年七月一日)「とても補考」(『藝文』昭和二年十月)『日本語漫談』所収

佐久間鼎『現代日本語の研究』第七章　程度の表現

松井栄一「近代口語文における程度副詞の消長」(『松村明教授還暦記念国語学と国語史』昭和五十二年　明治書院)

涌井澄子「程度副詞『とても』の研究—陳述副詞から程度副詞への用法の変化を中心に—」(『上越教育大学国語研究』昭和六十三年)

(5) 「とても」の傍点は、原文による。作者が意識的に流行語として使ったものであろうと思われる。

(6) 柄沢衛「『全然』の用法とその変遷—明治二、三十年代の四迷の作品を中心として—」(『解釈』二三二—二)

(7) 原栄一「今昔物語における副詞の呼応」(『金沢大学教養部論集』六　昭和四四)

(8) 注(4)　佐久間鼎

(9) 大阪市立大学国語学研究調査冊子第一冊『国語副詞の史的研究』昭和三十年

(10) 時代区分は『国語副詞の史的研究』により、以下のとおりである。

古代前期(所謂奈良時代)

後期(所謂平安時代)

中世前期(所謂鎌倉時代が相当する)

中期(所謂室町時代から江戸時代の極めて初期)

後期(概ね元禄期前後から以後の所謂江戸時代に相当する)

なお、「なかなか」の用例は、すべて注十『国語副詞の史的研究』によるものであり、もう一度自分自身で用例を取り、考察を行う必要を感じている。

(11) 小川輝夫氏は、いわゆる否定の陳述副詞がもともとは否定表現の場合も肯定表現の場合も用いられてよいものであったことを指摘し、「これが今日、肯定表現には用いられず専ら否定表現や禁止表現に限って用いられるならいになったのは、否定や禁止が肯定よりもより一層表現の強さを求められたからであろう」と述べておられる。(「否定誘導表現—陳述副詞の機能再考—」(『文教国文学』第十五号))

Ⅱ段階からⅢ段階への変遷については、「とても」など個々の副詞を対象として述べられたものがいくつかあるが、石神照雄氏の論は肯定文・否定文の原理と陳述副詞について述べた中でこの現象一般について説明されており、注目される。

石神氏は「副詞は文の直接の素材である現実事象に対し、言語主体が主観的に設定した観念的な像としての前提事象を対比することによって、そこにおける相対的な関係としての関係性を捉え表したものである」とされている。そして文の直接の素材となる対象を言語的に捉えたものである現実句と言語主体が自己の拠って立つ立場で観念として有する対象の像を言語的に捉えたものである前提句との間の不一致の承認である否定文を、「文の存立原理に対し見方を転換して、否定的事態の現実句と前提句とによる肯定文の原理に対してあると把握するとき」その文に存立する陳述副詞に対しては、「不一致の関係性の承認を構文上に顕現するものから、一致の関係性の承認を構文上に顕現するものへと、その具有する質を捉え換えることとなる。そのことは、次に、肯定事態の現実句と前提句をとりあげる肯定文の場合における関係性を表すことへと開かれる。すなわち肯定の陳述副詞である。更に、関係性の実質面を主にとりあ

げることによって、陳述副詞から程度副詞へと語の質を転換する。」と説明されている。

〔「副詞の原理」（渡辺実編『副用語の研究』明治書院　昭和五八年）〕

(12) 国立国語研究所報告70―1『大都市の言語生活』一九八一年　三省堂では、「全然」の他、「てんで」「ちっとも」に関して、肯定表現での使用を調査しており、「てんでうまい」は「全然すばらしい」以上に東京では「使う」あるいは「おかしくない」とする人が多いという結果が出ている。

(13) 小学館『日本国語大辞典』によった。

なお、使用した主な資料は次の通りである。

日本古典文学大系（岩波書店）「大和物語」「源氏物語」「蜻蛉日記」「平家物語」「太平記」「御伽草子」「風姿花伝」

宇津保物語研究会編『宇津保物語本文と索引』（笠間書院）

近世文学総索引編纂委員会編『近世文学総索引　井原西鶴』（教育社）『近世文学総索引　近松門左衛門』

『近代謡曲集』有朋堂文庫

『大蔵流虎明本の研究　本文編』昭和58年　表現社

『抄物資料集成』（清文堂）

日本近代文学大系（角川書店）『坪内逍遙集』『尾崎紅葉集』

明治文学全集（筑摩書房）『明治開花期文学集（一）』

坪田壌治編『赤い鳥傑作集』

『西周全集』（宗高書房）